

熊本

女性が守る「防災」「地域力」

〒860-0018
 熊本支局 熊本市船場町下1-48-4
 電話096-325-4166 FAX354-8603
 kumamoto
 @mainichi.co.jp
 八代・水保の 毎日新聞の
 情報提供は マイクロコピーは
 水保0966-62-5109 093-521-0668

1年の節目

アツという間に、また1年が過ぎて元日が回帰してきた。馬齢を重ねて「光陰矢の如し」といふことわざを感じる昨今である。昨年1年間、無病息災という第1目標を達成したことは喜ぶべきである。身体老化を埋めるだけの知性や内面の充実を磨くように心掛けるぞ、と

はがき随筆

「誰か来てくたさい、人が倒れています！」。傍らに意識を失った「傷病者」の人影が横たわる。講習会の参加者らは救わったとおり声を張り上げ、心肺蘇生とAED(自動体外式除細動器)操作の練習を繰り返した。

熊本市長 額南 竹本伸二 (83)

2012.1.1

2011年10月に横浜市であった第20回全女性消防操法大会で19回大会に続き優勝した美里町女性消防隊の選手たち



美里町役場提供

操法競技全国準V

美里町女性消防隊

「誰か来てくたさい、人が倒れています！」。傍らに意識を失った「傷病者」の人影が横たわる。講習会の参加者らは救わったとおり声を張り上げ、心肺蘇生とAED(自動体外式除細動器)操作の練習を繰り返した。

「心臓マッサージは胸部に力を集中して1分間に90回。『アンパンマンのマーチ』を歌いながらやるとういいます」。合間、合間にアドバイスを送るのは美里町の女性消防隊員たち。

美里町女性消防隊は19、57歳の30人。旧中央、砥用、2町が合併した04年、女性隊も合併した。救命処置講習のほか、一昨年は65歳以上の一人暮らし約600世帯を訪問して火災や災害があった時の「要救助リスト」を作成した。「皆さん喜んでくれました。『上がってお茶を飲んでいって』『大変だね』

今年「防災」と「地域力」の年に……。東日本大震災を機に防災意識が高まるなか、住民同士が助け合う「地域力」の大切さが見直されている。少子高齢化で老年寄り世帯が増え、近隣住民の助けなしでは災害時の緊急避難が難しくなっているためだ。そんな今、地域力の象徴といえるのが住民でつくる消防



火災現場に出動

津奈木町女性消防団

毎月機械点検と放水訓練を欠かさない長浜良子団長(手前右)たち。日ごろの準備が防災の力になる

「正、全開よ！」。津奈木町女性消防団長、長浜良子(52)が後方消防ポンプを操作する若手団員に指示を飛ばす。両手には男性団員が使うのと同

直径65mmの消防ホース。指示とともに放水の勢が増した。「ゴーン」という噴出音。長浜さんは班長の山口真由美さん(56)、松本弘子さん(51)らとホースをつかむ手を力を入れた。水力全開のホースは、男性でも一人で押さえられるかどうかという力がかかる。女性の細腕で狙いを定めるには日ごろの訓練が欠かせない。

長浜さんは県内で唯一、全国でも珍しい火災現場に出動する女性消防団だ。いつどこで起こるか分からない火災に備え、放水訓練を兼ねた機械点検を毎月行う。現場さながらの緊張感のなか、早朝から小型ポンプ車を駆り、近くの平国川下流で練習を積む。

津奈木町の女性消防団は1951年、町北部の福浜地区の女性たちが結成した。福浜は八代海に臨む漁師町

で、当時はイワシなどの地引き網漁が盛んだった。男性団員が出動する日中に火災や災害が起きると地区を守れないため「おっ母」連中が立ち上がった。現在は29、56歳の23人が仕事と家事との「三足のわらじ」で奮闘する。

ほとんどの男性が漁師仲間だった60年前と違い、今は町外での会社勤めや農業など職業が多様化する。地域の結束を保つのは昔ほど容易ではないが、そこを女性団員たちがつなぎ止めている。

「火事や台風の際は、そこへんにおる人みんな使えとですよ。お互い知らん人はいないから」と副団長の長浜豊子さん(56)。出先で雨が降れば「うちの庭の洗濯物は取り込んで」と電話し合える近所付き合いがある。どの家がお年寄りか、一人暮らしか、

「地域」だからできる女性消防団です」と長浜さんたちは感謝する。地域のかすがいとなっている女性消防団は、同時に地域が育てあげた防災の力でもある。



救命処置を町民に教える美里町的女性消防隊員(右から2人目)

地域面は3日から再開します

きょう元日(日)は新聞製作を休み、2日(月)の朝刊は休ませていただきます。ご了承ください。地域面は3日(火)から再開します。毎日新聞社

「こんな小さな町が全国優勝なんてすごい。大会後、松本さんが残るが、女性消防隊の活躍が一体感と「わ

が町、美里」の誇りをもちました。「今年も町の皆さんのために」

災害時に力発揮「消防団」

県内は東に山地があり西は海に面した地形から、気象災害では梅雨前線や台風などによる豪雨、土砂災害、高潮被害に見舞われてきた。沿岸部では99年の台風18号などによる高潮被害も起きている。

また地震では、阿蘇から八代海まで縦断する布田川・日奈久断層帯をはじめ、国が地震に関する評価をしている主な活断層が六つあり、内陸や沿岸の浅い場所や宮崎県の日向灘で起きる地震が被害をもたらすとされている。

県内災害概況

一方で地震に伴う県内の津波被害は、1960年のチリ沖地震による天草市本渡の床上浸水が最後。県や沿岸市町の地域防災計画で津波に関しては避難態勢が主で、被害想定まではしていなかった。

東日本大震災の発生を受け、県は地域防災計画の見直しを進めており、津波の被害想定調査は13年2月ごろまでにまとめる予定。

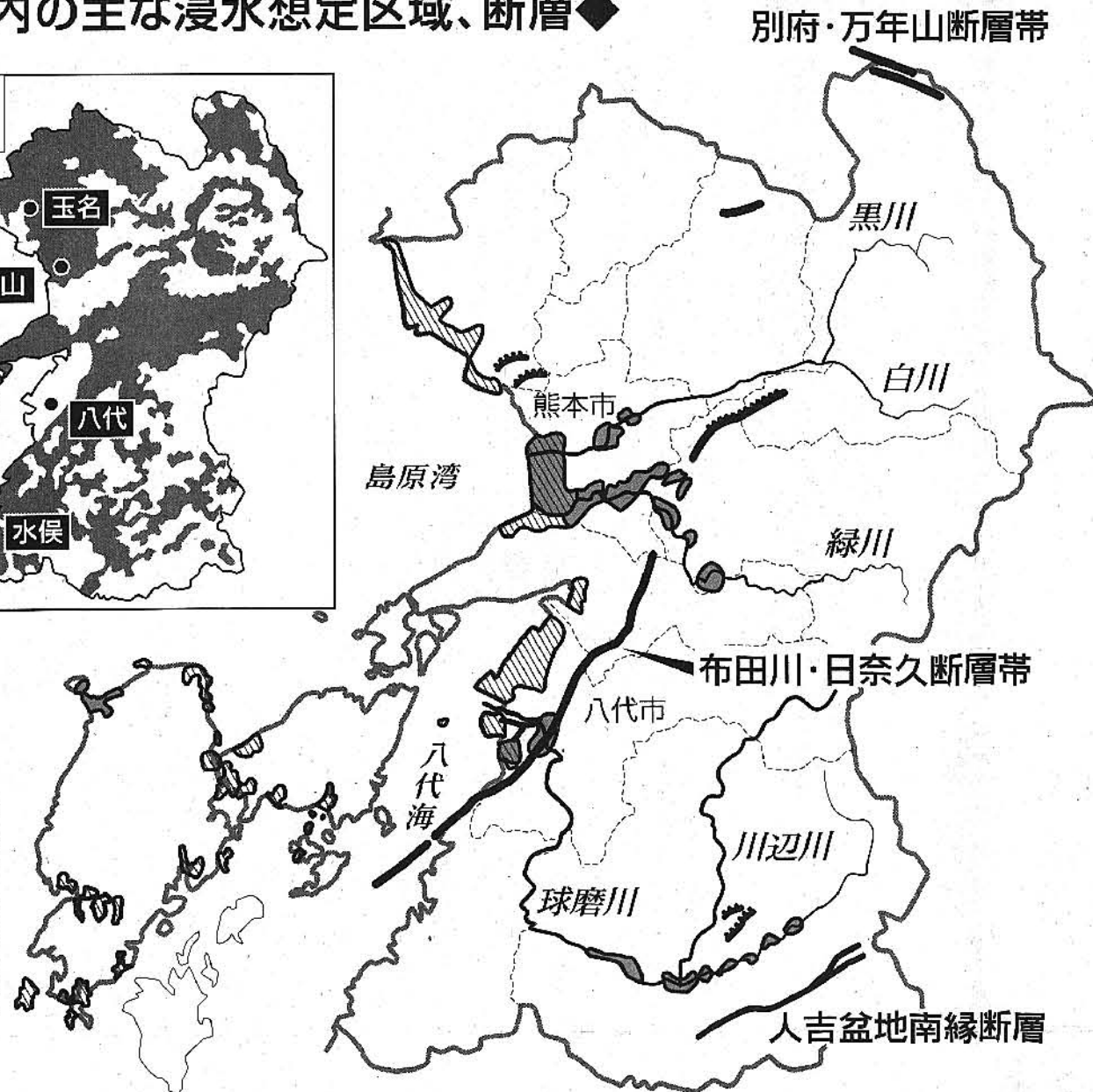
各市町村の地域防災計画への反映は、県の検討結果の後になるが、市町村でも検討が可能な避難所の見直しなどは順次進めている。

◆県内の主な浸水想定区域、断層◆



浸水想定区域

高潮浸水想定区域



※各自治体のハザードマップなどをもとに作成

住民が地域ボランティアの精神で従事する消防団は、消火活動や災害発生時の住民救助、避難誘導など被害の拡大防止に力を発揮する地域防災の要だ。しかし、団員数は減少の一途で高齢化も進み、機能低下が懸念されて久しい。東日本大震災では活動中などに250人超が亡くなり、改めて在り方が問われている。

全国の消防団員は1950年代には200万人いたが、90年に100万人を割り10年4月現在で88万3698人。県内は3万5078人(前年比111人増)で兵庫、新潟、長野、福島、福島の4県に次いで全国5番目に多い。うち女性数は576人で、こちらも東京、北海道、神奈川、長野に次ぐ5番目の多さ。

昔と違って自営業者や農業、漁業従事者が減り、住民の大半が会社員などのサラリーマン。地元市町村の外で働く人も多い現在、消防団員の確保は年々困難になっている。1965年の年代別構成比は20代42%、30代45%だったのに対し、2010年は20代18%、30代40%にとどまる。少子化で後継者がいないため40〜50代になっても引退できない団員が多い。

「地域防災の要」減少一途 高齢化進み機能低下懸念

県内は10年、前年比111人増で減少に歯止めをかけた。100人以上増えたのは189人増の東京都、143人増の岩手県の3都県。女性団員(49人増)や学生団員の増加、参加できる活動にだけ携わる機能別団員の採用などが奏功した。

東日本大震災では改めて消防団の存在がクローズアップされた。どの世帯がお年寄りの一人暮らしか、といった地元情報に通じているためいち早く救助、避難誘導。不

県内 機能別採用など奏功 団員、前年比111人増

明者の捜索でも力になった。自治体関係者からは都市部でも同様に活動ができるか懸念する声が上がっている。

一方、住民の避難誘導や水門閉鎖をしている最中に犠牲になった団員も多い。日ごろから訓練を受けているわけではない団員にとっては心身の負担も過大だった。総務省消防庁は被害が起きた状況を検証し、検討会で再発防止を議論する。

熊本

〒860-0018
 熊本支局 熊本市船場町下1-48-4
 電話096・325・4166 FAX354・8603
 kumamoto
 @mainichi.co.jp

八代・水俣の 毎日新聞の
 情報提供は マイクロコピーは
 水俣0966・62・5109 093・521・0668

熊本県女性消防団活性化セミナーで寸劇を披露する人たち



第2回県女性消防団活性化セミナーが11日、熊本市水前寺の水前寺共済会館であり、県内から200人以上が参加した。女性団員が日ごろの活動内容発表や情報交

体験発表や寸劇披露

女性消防団活性化セミナー

熊本

換を通じて活動を盛り上げようと県消防協会が開いた。東日本大震災から11カ月となるのを受け全員で黙とうした後、米村昌昭会長が「東日本大震災では消防団の活動が注目され、地域に根ざした女性消防団への期待も大きくなっている」とあいさつした。

第1部では熊本市消防団第79分団、人吉市女性消防隊など6団体が体験発表や地震への備えに関する寸劇などを披露した。

同協会によると、女性消防団は県内45市町村のうち36市町村で組織され、団員数は全国

で5番目に多い632人。全体の消防団員数が減少する中、10年前から倍増しているという。09、11年度の全国

女性消防操法大会(隔年開催)では美里町女性消防隊が連続準優勝という好成績を収めている。